

逆立ちする<有名人>

宮沢りえから柄谷行人まで

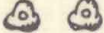
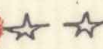
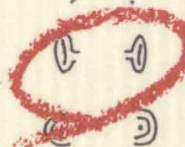
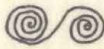
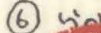
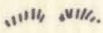
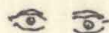
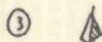
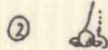
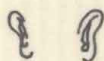
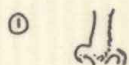
Noses

Eyes

Mouth

Ears

Eye
Brows



黒沼 克史

Katsushi Kuronuma

逆立ちする〈有名人〉

宮沢りえから柄谷行人まで

黒沼 克史

〈著者略歴〉 1955年北海道生まれ。
都立西高校、筑波大学社会学類を卒業後、出版社勤務、「週刊文春」記者等を経て、89年よりフリーに。本書が処女出版。血液型はA型。

逆立ちする 〈有名人〉

宮沢りえから柄谷行人まで

1991年4月25日 第1刷

著 者 黒沼克史

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 (03) 3265-1211

定価はカバーに表示してあります

万一、落丁乱丁の場合はお取替えいたします

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Katsushi Kuronuma 1991 Printed in Japan

ISBN4-16-345140-4

目 次

宮沢 りえ——セブンティーン 7

'73年4月6日生まれ/B型

片山 右京——時速386キロの肉体と心 25

'63年5月29日生まれ/A型

さくらももこ——ちびまる子の誕生 43

'65年5月8日生まれ/A型

香取 淳——神遊びの時代に 63

'58年5月18日生まれ/AB型

武田 花——猫と花さんと眠そうな町 81

'51年10月31日生まれ/たしかB型

高嶋 政伸——ジュニアからの回答 99

'66年10月27日生まれ/B型

井上 一馬——あなたはどうか訳しますか? 117

'56年7月29日生まれ/A型

高泉 淳子——少年になれば自由 135
'58年7月26日生まれ/B型

一色 伸幸——脚本家になろう! 153
'60年2月24日生まれ/AB型

桐島かれん——二十五歳でイノセントになる方法 173
'64年8月20日生まれ/A型

野村 宏伸——いつのまにかポルシェに乗って 191
'65年5月3日生まれ/B型

田村 翔子——帰国子女モデルのふわふわ 211
'65年9月4日生まれ/A型

柄谷 行人——逆立ちしても考える 227
'41年8月6日生まれ/AB型

あとがき 244

GREGORY TAKEZO YERMAKOV: イラスト

大松 龍: 写真

平林 育子: ブックデザイン

逆立ちする〈有名人〉

宮沢りえから柄谷行人まで

セブンティーン

宮沢 りえ

'73年4月6日生まれ/ B 型

十七歳の頃、あなたは何をしてましたか？

単車の後部シートでハチマキして、パパラパラ、の族？ ラジカセといっしょに列車を乗り継ぎ、竹下通りのファーストフード店でハデな衣装に着がえて、ソーレ・ソーレ、の竹の子？ 中原中也が妙にしっくりきちゃって、汚れちゃってとっても悲しいのよ、の文芸部員？ 一日の休み時間を全部たしても、友達との会話は三分にしかならなくて、試験に出る英単語、のガリ？ 食べた物がみーんな汗と涙と根性とチームワークになってしまっ、ファイト・オー・ファイト・オー、の体育会系夢追い人？

いろんな十七歳がありまして、高校に進学しなかった宮沢りえの十七歳は、たとえば巨人軍がリーグ優勝を決めた日に、東京ドームの日本テレビ特別席で飛び上がっていたりする十七歳なのであります。

超多忙空間をすり抜けたプライベート観戦。もちろん、ノーギャラ。でも、テレビカメラは目ざとく彼女を見つけて、映す。有名じゃーん、の、映される人だ。

「その日、新番組の記者会見があったんだけど、それは七時に終わるっていうの。もしかし

たら優勝が決まるかもしれない。そう思って、日テレの人に自分で電話したの。

『もしもし、宮沢りえと申しますが』

『えっ、本当に宮沢さん？』

みんな、いたずら電話だと思うんだよね。でも、自分で電話してチケット取ったの。うれしそうな顔してたでしょ？」

恥ずかしいから向こうで話すわ——母親にそう言って、四谷の「スタジオ・リバー」のメイクルームを選んだのは、宮沢りえ自身だった。マネージャーでもある母親は、最近、雑誌などでステージママのチャンピオン格のように取りあげられている。だから、インタビュにもマネージャーの厳しい規制がつくのかと思っていた。でも、ひとりでメイクルームに入っていく宮沢りえに、伝えられるような不自由さは感じられない。

「そういうこと、ちゃんと話せばいいのに」と僕は言った。

「でも、ちゃんと話しても書いてくれないから、真剣に話す気にならないよ。せいぜい、ふんどしはどうですかっつきかれるくらい。全部自分で決めてることなのに、みんな、周りがさせたって。それじゃあ、私に意志がなくて、ハイハイってやった子みたいじゃない。そういう子って、すごくイヤなの。でも、もう、いいわよって感じ。そんなの、別に試練だとも思っていない。私、本当は好きなんですよ、インタビュ。自分でお話してみて、あっ、私こういうこ

とも知ってたわっていうのがわかったりするから、好きなの。ただ、バカですから、ホントに。バカで、物知らないだからね」

と宮沢りえは、半ば、あきらめの境地にいるようだった。

メイクが始まると、彼女は目の前の鏡を使って話し出す。僕は鏡に反射した十七歳と話すのが照れくさくて、宮沢りえの横顔に向かって話しかける。このへんがいちばんいいところじゃないかな、と一般人の僕から見えた化粧の段階は過ぎて、さらにカメラの前に立つための職業用の化粧が重ねられていく。でも、話の内容は、きわめて元気な、ふつうの十七歳のままだった。

ジャイアンツファンで特に川相が好きなんだっていうことは、ほとんどどんな雑誌にも書いてある。担当の編集者がたまたま有楽町の「そごう」を通りかかったら、その川相のサインボールを売っていたそうで、きょうはそんなプレゼントの隠し球もある（本当にたまたまなんでしょう）。ところが、このプレゼントはちょっとしたクセ球でもあった。

どうも、デパートのラッピングの様子からすると、それほどありがたいプレゼントには見えない。まあ、超アイドルが喜んで受け取ってくれるような雰囲気生まれたら渡して下さい、とそういうことになっていた。で、すぐに渡すことになっちゃった。編集者は、「持ってるかもしれないけど」と言っただけで川相のサインボールを差し出した。



「私、本人だけのサインボールは持ってないんです。大きいボールにジャイアンツ全員のが入ってるのは持ってて、あと、藤田監督のサインボールはひとつ持ってる。本人のサインが入ってるのはメガホンしかないの。ワー、うれしい。ありがとう。すごくうれしい」

宮沢りえが喜んでいるのを横で聞いていて、少し冷や汗が出た。こっちの方がジャイアンツ・グッズに関して完全に格下だ。ジャイアンツに友人がいるような感じの編集者ではなかったし、僕も藤田監督に話を聞いたことはあるけれど、サインボールは持ってない。

「でも、これ、印刷じゃない？」サインボールを見ていた宮沢りえが素朴な疑問を投げかけた。「これ、いくらしたんですか？ えっ？ 八百円？ じゃあ、印刷かもしれないね」

僕は冷や汗をダラダラ流してその場をとりつくろった。そして、編集者ともども、この後の彼女の気づかいに厚く感謝することになる。宮沢りえはこう言った。

「わかんないけど、でも、すごくうれしい」

言いたいことをズケズケ言うのだが、人の気持ちを読めない超アイドルではないようだ。

「家族がみんなジャイアンツファンで、ちっちゃい頃から、夏の夜は野球のテレビ以外やってないと思ってたくらい。巨人は生活の一部に入っていて、毎晩、枝豆といっしょに必ず出てきたの。好きにならざるを得なかったという感じ。でも、川相っていう選手は、全然知らなかったんですよ。去年（一九八九）、糸井（重里）さんと徳光（和夫）さんと日本シリーズを観て

た時、川相はホントにプロだっている感じがしたの。

プロらしいプロじゃなくて、アマチュアっぽいプロでね、一塁に頭からすべり込んだの。私、そんな人初めて見た。プロらしいプロは絶対にそういうことしないと思うのね。アウトだってわかってるのに、そんな、自分の意地みたいなものをカワイく見せた。その時に、ヘエーと思ったの。そういう人が巨人の中にいて、ちゃんとスタメンに入ってるっていうのが、何か不思議な感じがしてねえ、それですごく好きになったの」

宮沢りえが観戦している時の巨人軍は、お化けのように強い。十二勝二敗。勝率八割五分七厘。土壇場で巨人が逆転勝ちすると、ポロポロって泣いちゃうくらい、病みつきになっている。

「本当は高校野球、大好きなんだけど、あんまり好きじゃないの」

この、なんだか矛盾した野球ファンの心理解説を聞いていると、宮沢りえの若い球筋が、おぼろげながら見えてくる。

「プロ野球って、一度負けてもまた次の日があるさって、そういう感じでしょう？ でも、甲子園はそうじゃない。一回負けちゃうとそれで終わり。ドラマチックなんだけど、それがすごくイヤなの。自分がずっと応援してきたチームが負けちゃったりすると、一週間くらい立ち直れなくなったりする人だから、プロ野球のほうが好きなの。この夏、たまたま沖縄水産高校のドキュメンタリーをテレビで観たの。で、沖縄水産が天理に負けたでしょう。もう、オロオ

口とかいう感じだったから、高校野球は一所懸命応援しないことにしてるの」

応援上手なんていう言葉があるかどうか知らないけれど、スポーツに関して言えば、彼女はそうだ。たとえばバスケットをやると3点シュートしか狙わない人とか、ピッチャーにしてあげないと野球に加わらない人とか、陽のあたる場所を好むスポーツマンタイプってかなり多いのだが、彼女は周りで小旗を振って盛り上げるタイプだ。

「スポーツってね、やるより観るほうがずっと好きなの。日曜日とか、面白いテレビないかなあって見てたりしてて、新体操とかやってたりすると見入っちゃうほうなの。全然知らないアメフトとかでも、人が一所懸命戦ってたりすると、見ちゃう。自分がそういうふうにな一所懸命やることがないから、そういうのをワーワーって楽しそうに観るのかもしれないね、きつと」

十七歳の売れっ子タレントに日々たまっていくはずのストレスが、宮沢りえにはない。つらい思いがないのだと言う。それは多分、ポカリスエットのCFでカンフーをやっても、リハウスしてきた白鳥麗子ですって美少女としても、雑誌のグラビアでヒョーキン顔にくずしても、ドキッとするような色っぽいポーズをとっても、「ざあけんなよ」「ぶっ飛び」のけぞり」なんて男まさりのセリフを言ってもサマになっちゃう不思議と、無関係ではないんだと思う。つまり、楽しそうにやってるなあ、ということなのだ。